

朝日みどり小学校と嘉納治五郎

はじめに

皆さんは「嘉納治五郎」という人物をご存じですか？柔道を習った方ならすぐ「明治時代に日本の柔道を作った人だ！」と答えるはずですが。その嘉納治五郎と朝日みどり小学校とはどんな関係があるのでしょうか。また、なぜ嘉納治五郎は新潟県の県北の地を訪問したのでしょうか。謎は深まるばかりです。

それで、嘉納治五郎のことを調べてみることにしました。



嘉納治五郎の『精力善用』の書

嘉納治五郎（かのうじごろう）【万延元年（1860年12月）～昭和13年（1938年5月）】は明治から昭和にかけての柔道家、教育者として知られています。講道館柔道の創始者であり柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力するなど、日本におけるスポーツの道を開いた人物です。「柔道の父」と呼ばれ、また「日本の体育の父」とも呼ばれています。以下、嘉納治五郎の略年譜をご覧ください。

1860年（万延元）、摂津国（現神戸市東灘区）に生まれる。

1873年（明治6）、明治政府に招聘された父に付いて上京し、書道・英語などを学ぶ。

1877年（明治10）、東京大学に入学する。

1879年（明治12）、渋沢栄一の依頼で、ユリシーズ前アメリカ大統領に柔術を演武する。

1881年（明治14）、東京大学文学部哲学政治学理財学科を卒業する。

1882年（明治15）、独自に「柔道」をつくり、東京下谷に講道館を設立する。

1909年（明治42）、日本人初のI O C（国際オリンピック委員会）委員となる。

1911年（明治44）、大日本体育協会（現日本体育協会）を設立しその会長となる。

1912年（大正元）、日本が初参加したストックホルムオリンピックに団長として参加。

1938年（昭和13）、I O Cから帰国途中、氷川丸の船内で死去。（77歳没）

嘉納治五郎は書家としても一流を極め、堂々として勢いのある書風に揮毫の依頼が多く、その書額は今も全国に残されています。『精力善用』、『自他共栄』、『順道制勝』など、合計226件にも及ぶそうです。現在の灘中学校・灘高等学校の大講堂に掲げられている書額は、嘉納治五郎が後年座右の銘とした『精力善用』『自他共栄』の二面で、同じ文句の掛軸仕立てのものが講道館の資料館に展示されているそうです。



朝日みどり小学校にある『精力善用』の書額

話はそれますが、名門校の「灘中学校・灘高等学校」の沿革には、「灘中・高等学校は

昭和2年10月24日、旧制灘中学校として創立された。創立に当たっては、嘉納家の親戚で、当時東京高等師範学校（現筑波大学）校長兼講道館館長であった嘉納治五郎先生を顧問に迎えて尽力いただき、校是にも柔道の精神『精力善用』『自他共栄』を採り翌3年に開校の運びとなった」とあります。この書額にある『精力善用』とは、心身の持つ全ての力を最大限に生かして社会のために、善い方向に用いること。『自他共栄』とは、相手を敬い、己の技を磨かせてくれた相手に対し感謝をすることによって相互を信頼し助け合う心を育み、己だけでなく他の人と共に栄えある世の中を築いていこうという意味です。

嘉納治五郎と旧高根村関口との関係

実は、この『精力善用』の書額が朝日みどり小学校の多目的ホールにも存在しているのです。私が朝日みどり小学校に赴任した当初、誰の書なのか分かりませんでした。そこで、その書に記されていた「帰一齋」という号を手がかりに調べたら、嘉納治五郎のことであることが分かったのです。また、『精力善用』の書の隣には、嘉納治五郎ではない人物の写真が掲げられています。額の裏面には、「横山巖」なる名前があり、その人物と嘉納治五郎の書額の関係について調べたところ、意外な事実を発見しました。「朝日村史」には、以下のようにあります。



横山 巖

大正14年高根村関口（現関口集落）の篤志家横山巖が、自ら修業した柔道の普及を思い立ち、自費を投じて邸内に道場を建設、『尚武学館』と命名して、広く村内外に門弟を募ったところ、集まった門弟百名を越える盛況であった。その道場開きは恩師の講道館長嘉納治五郎以下、山下義昭（昭は実際には韶）、磯貝浩の両八段、その他県下の高段者を招いて行った。以来館長自ら熱心懇切に指導したために、門下の有段者百名を数えるという、まことに柔道の村高根を実現したのであった。

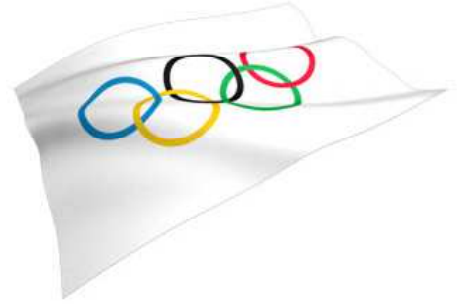
その頃の朝日村は、下川郷と称し、明治34年から昭和29年まで、館腰村、三面村、高根村、猿沢村、塩野町村の5か村でした。その一つである高根村は、薦川、高根、関口、北大平、黒田、中原、岩沢の各集落で構成されていました。昭和29年10月には合併して朝日村となり、日本一の面積を有する村となりました。右の写真は、説明に「大正15年（1926年）



5月19日柔道家嘉納先生来村時の記念写真」とあります。中央先頭の和服姿が嘉納治五郎です。この玄関は『尚武学館』であると思われます。朝日村史の年表には、大正10年（1921年）4月、「嘉納治五郎関口村を訪う」とあります。先述の「大正14年に道場『尚武学

館』を建設」とは時期が少しずれています。記述を間違っただのか、あるいは大正10年と大正14年、大正15の3回来村したのか定かではありません。また、年表には、「明治44年（1911年）2月11日、横山巖尚武学館を開く」とあり、これも大正14年とは大きく時期がずれています。

いずれにしても、嘉納治五郎が高根村関口集落と関わっていたのは事実であり、奇しくも明治44年（1911年）は、嘉納治五郎が大日本体育協会（現日本体育協会）を設立し会長に就任した年でもあります。また、翌大正元年（1912年）にはストックホルムオリンピックに団長として出場するなど、海外に日本をアピールすると同時に、当朝日地区などの一地方にも目を向けて武道や体育の普及に努めようとしていた様子が見えられます。



今でも、オリンピック等に出場する柔道日本代表選手団は嘉納治五郎の墓参が恒例となっているのだそうです。『精力善用』（全ての力を最大限に生かして社会のために善い方向に用いること）の精神は、決して古い教えではないことを私達に伝えてくれています。

(2012年up)